

私が住む坂田にはかつて私が自治会長をさせていただいた事がきっかけで「坂の会」と言いわばOB会が20年余り続いております。

毎月例会、月会費 1,000 円、会員20名準会員5名でほとんど無欠席であります。

良く続いているコツは「童心にかえって家族や身内にも話せない悩み、弱みを話し合い、お互いに助け合って共に生きて行く」でありました。

そして…

- ①明るい笑いの多い話題
- ②十歳くらい若くおしゃれを心がける③それぞれ趣味を持つこと
- ④電話や手紙をこまめにする
- ⑤少し背伸びしてケチケチしない
- ⑥月一度小旅行、コンサートへ年一回は大旅行をする…会う事多ければ良き友になるからであります。

先日私の誕生日は7月3日でしたので、誕生祝を私の茅屋ですることになりました。何せ私の家は今時珍しい山の中…庭は雑木林の体をなしております。

仲間達は2日程前から庭木の枝を落とし、草を取り、箒箒を置き換え、窓を拭き、敷物を乾かし、花を生けて我が家は姿を変えました。

当日はその食卓には自前の山海珍味や料理でいっぱいでした。

この日の酒の肴は…一人一人が昔の思い出話を語る事になりました。

幼い日、初恋、見合い、新婚旅行、孫の自慢話に涙をこぼして大笑いでした。高齢者の脳の活性化には、昔話をすると通常の80倍もの活動をする事は最近の医学で証明されております。

このフィナーレは「線香花火」でした。

4～5人ずつ輪になり、小さな花火に年甲斐もない歓声が上がりました。庭いっぱいの煙の中に、私は幼い日縁側に座った祖母と母、弟達とはしゃぎ回った遠い懐かしい日を思い浮かべておりました。

誕生日とは、自分を祝うだけでなく、うんでくれた母、育ててくれた父や祖父母に改めて感謝し、思いをはせる日であり、感性を持ちたいものです。

新刊「渡辺淳一」の「あとの祭り～親友はいますか～」の一節で、つい先日『渡辺先生、親友はどなたですか』と若い女性に聞かれて、一瞬戸惑った結果、「いないなあ」としか答えられなかった。高校生くらいまでは何人か数えられたが、時が経つにつれて親しい友人がいなくなってしまった気がします。今も仕事、飲み仲間はあるけれど、少し違っていわば良き理解者であります。なぜ年をとるにしたがって親友がいなくなったのかは、社会に出て目指すものの環境が違い、親友は少しずつ減って行くのかもしれない。

そして男は老いると孤独になって行くのです。それだけ男は（私は女性も同じと思うが…）可哀想だが…一つだけ方法がある。それは身近に親しい何でも話せる女性を持つことです。妻でも彼女でもいい、好きな女性に思い切り本音を告げて、こちらの気持ちを分かってもらえればそれが男の本当の親友かもしれません。』

皆さんも不況の時代を生き抜くためには「心の支え」になる良き親友を持って下さい。